

國學院大學紀要 第56巻 抜刷
平成30年1月発行

夢から醒める読者たち

——『骨董屋』の「天使たちが守るベッド」の役割——

木 樽 周 夫

夢から醒める読者たち

——『骨董屋』の「天使たちが守るベッド」の役割——

木 樽 周 夫

キーワード

チャールズ・ディケンズ 『骨董屋』 ベッド イギリス 読者

序論

チャールズ・ディケンズの *The Old Curiosity Shop* (1840-41) は主人公の少女ネルが外部からの侵略を逃れ祖父と田舎に行くことで、彼女がいるべき場所を見つけ出せるだろうと読者に予期させる冒頭で始まる。しかし、彼女は2人にとっての安らぎの場所を発見することはできない、もしくは彼女が求めるような場所はどこにも存在しないことを読者に知らせる物語でもある。悪役のクウィルプが骨董屋を差し押さえ、ネルの部屋にあるベッドを奪うことで、ネルは自分の居場所を失う。また、彼女の祖父は「天使たちがお前のベッドを守ってくれますように」(17)⁽¹⁾と言うが、のちに祖父によって彼女の眠りは妨害される。クウィルプというグロテスクな登場人物に家の内部に侵入され、老人によって寝床を奪われる様子は、ネルという純粹無垢な「天使たち」から守られるべき存在が外部からの不当な力によって蹂躪される象徴的な場面である。ベッドや寝室を探し出せても、彼女がそこで眠れないことを強調することで、この物語はネルのように純粹で無垢な主人公は必ず救われるだろうという読者の期待を煽っている。

しかし、ネルの行動や彼女と出会う登場人物の暮らしを知ることで、読者はネルが田舎で見つけられると考えているものは元々存在しなかったという事実と直面する。ネルの逃避行は読者に目的地または出口にたどり着けることを確信させ、それによって読者は自分

が見つけ出したいものも見つかると思ひ込むのである。彼女がかつてあったと信じられているイギリス像を反映するように描かれることで、読者は彼女をふさわしい場所で眠らせたいと思うが、結局天使たちが守るベッドが架空のベッドであることが明らかになる。この物語は、ネルが安らげる場所を見つけられるという読者の期待と誤解を用いながら、最後には読者が自分は誤解させられていたことに気づくように仕組まれている。誤解に気づいた読者は夢から現実世界へと引き戻されることになる。

1. 奪われる場所

この物語は迷子になったネルが自宅である骨董屋に戻り、骨董品に囲まれて眠る場面から始まる。彼女はクウィルプのところに使いに行った帰り、道に迷う。たまたま通りかかった語り手であるハンフリーに助けを求める。ハンフリーは彼女の家が「かなり離れたところ」(9)と思ひながら、彼女を連れて行く。彼女は冒頭の場面ですでに住んでいる場所から遠く離れた場所へと移動し、迷子になり、人に助けを求める。この時点でネルが自分の家から遠く離れ、迷子になる可能性がある存在だと分かる。冒頭から彼女がすでに失ったものを探し求める物語であるという設定が読者に示されている。その無垢なネルの生活を脅かす事件が、「天使たちが守ってくれる」彼女のベッドを中心に引き起こされていくことになる。守られるべき価値の象徴でもあるネルが、クウィルプと彼女の祖父によって、2度、眠りを妨げられる。それでも、ネルは奪われたベッドを取り戻すために祖父と旅に出る。

読者はネルが、イギリスが失いつつある自国の価値を持ち合わせていることと、その象徴であるネルがその身を落ち着かせる場所を見つけ出せることを期待する。ハンフリーが家の中まで彼女を送り届けると、彼はそこにネルが使っているベッドがあることに気づき、「そこには妖精が寝ていたかのような小さなベッドがあり、それはとても小さく、かわいらしく整えられていた」(11)と思う。歴史的伝統を象徴する骨董品に埋もれるようにある、ネルのベッドをハンフリーは見つける。このベッドからも読者のネルに対する失った物を見つけ出すだろうという期待は高まる。Paul Schlickeは「ディケンズがこの小説のヒロインとして無垢な少女を理想化されたイメージとして提供することはイギリスの歴史上、この時期において非常に適切であった。(中略)ネルは国民の羨望の的となる古き良き価値を表す文化的な象徴としての役割を果たす」⁽²⁾と分析している。この物語では読者にこのような印象を与えるように主人公が描かれている。つまり、かつてのイギリスの象徴であるネルは古いものに囲まれて住まなければならない、そこに安息のベッドがあり、家から

遠く離れてはいけない存在であることから、どの読者でもこの分析と同様の読み方をするだろう。しかし、彼女の若い無垢さに表象されるような、かつてあったはずのイギリスがどのようなものであり、また彼女にふさわしい場所がどこにあるかを決定づけるほどの描写は実は見当たらない。

ネルの骨董屋が悪党のクウィルプに占拠される場面では、彼女のベッドが守られなければならないものとして描かれる。第11章では、古く歴史的なものを象徴し保存する骨董屋と、店主である彼女の祖父が外部からの攻撃に脆弱であることを表している。占拠された小さなベッドもネルの存在の弱々しさを感じさせる。この外部からの侵略行為のために、純粋無垢な象徴的存在であるネルは彼女の居場所である骨董屋から追放される。この事件以降、彼女は自分のベッドで寝られなくなる。彼女のベッドを見たクウィルプは「あのベッドはだいたい自分と同じ大きさだ。あそこを私の小部屋にするとしよう」(93)と考え、占拠する。自分のベッドが奪われるのとほぼ同時に、ネルは自分が寝ている間に、「帰宅したおじいさんが自殺し、その血が床をつたって自分の寝室の入り口まで流れてくる」(77)と想像する。そしてクウィルプに家を占拠された後、祖父が寝ているベッドは「燃えるようなベッド」(90)であり「休むことが出来ない」(99)と描写される。この場面では休む場所であるベッドが不快な場所として描かれることで、ネルの違和感を表している。彼女の違和感は、ベッドが快適な場所でなければならぬと読者に思わせ、読者は彼女に落ち着いて眠れる場所が提供されることを期待する。

ネルの目的地は、読者の期待に応えるためにも、かつてあった純粋さを維持できる場所ではなければならない。クウィルプによる占拠があり、彼女はロンドンから抜け出し、祖父を連れて自らの新しい居場所を見つけるために田舎へと移動を始める。彼女の祖父も「もっと遠く、ネル、もっと遠くに行こう」(126)と孫に懇願する。ネルもクウィルプの悪影響を受けている祖父をロンドンから離れさせたかった。Schlickeは「ネルと祖父にとって、田舎は健康的な空気、自然美、邪魔されない休息と、ロンドンを覆い尽くす不快さ、攻撃的な迫害からの逃避を約束する場所である。しかし初めから、その約束の実現は漠然としており、また完全に不可能だという、二重の矛盾が彼らの進む道にある」⁽³⁾と言及する。確かにネルと祖父の行動には矛盾があり、田舎に行くことで彼らが直面している問題が解決する保証はない。しかし、この物語で強調されていることは、このような矛盾が読者に、ネルが困難を乗り越え、最後に彼女は救われる存在であることを一層期待させることである。

ネルとクウィルプの関係は侵略される側と侵略する側の関係を保ち続ける。Molly Clark Hillardの「もしネルが清潔で純粋な妖精であって、それはディケンズが回想した

いかつてのイギリスそのものであるなら、美德とはかけ離れた小鬼であるクウィルプは、ディケンズが恐れるような現代のイギリスの姿を表している⁽⁴⁾という分析から、クウィルプに投影される現代のイギリスの姿が見えてくる。作中で、ネルには妖精という言葉が使われ、クウィルプは小鬼と表現されることから、ネルの姿はかつての美しいイギリスを、クウィルプからは醜い現代のイギリスを読者に想起させる。クウィルプは人に金を貸し、そのことで自分の立場を優位にしている。この物語に描かれる恐れるべき現代イギリスの姿は金銭に起因するようである。Gareth Cordery は「クウィルプの経済的豊かさは明らかにロンドンとそこでの商売によるものである。この物語を、または特にクウィルプを読解する上で、1830年代はこのような多様な起業家的活動の重要性を評価する時代であったことを知る必要がある⁽⁵⁾」と指摘する。悪役であるクウィルプがロンドンと金銭を象徴する役割を果たすことで、それらが悪であるかのような効果を発揮する。クウィルプは、財産はないが古くからある骨董屋を占拠し乗っ取り、財産のない人々をその家、または土地から追い出す。金銭的な優位者がそうでない者を追放する時代を批判するような描き方になっている。そのようなクウィルプの行動によって、ネルと祖父がロンドンにいることと、金銭の問題に関わることを避けるべきことであると読者は判断する。

しかし、悪役のクウィルプはこの店を不当に占拠するが、クウィルプに店を奪われた原因は祖父の借金である。この借金のために、2人がロンドンにいられない状況を生み出したことを考えると、2人は読者が思うほど純粹無垢な存在ではないのかもしれない。無垢で純粹だが貧しく力のない存在として描かれるネルと、それを侵すグロテスクなクウィルプの外的な力との関係はハンフリーの臆想からも示される。彼は *'It would be a curious speculation [...] to imagine her in her future life, holding her solitary way among a crowd of wild grotesque companions; the only pure, fresh, youthful object in the throng. It would be curious to find —'* (20) と述べ、ネルの今後の人生に思いをめぐらす。ハンフリーがこの時点で読者に、ネルが「若い存在」と指摘しているにもかかわらず、未来の世界で彼女が生き抜くことが「奇妙」であると読者に告げている。彼の言葉からは、彼女がこれからのイギリスで暮らしていくことを読者は期待できない。同時に、若い存在のネルにかつてのイギリスを押しつけることもまた、難しいはずである。しかし、妖精のネルと小鬼のクウィルプという表現から、昔と変化のない場所を求める存在としてのネルと新しい力の強さを示す外部としてのクウィルプを対比させることで、読者はこのハンフリーの暗示を無視してしまうのである。

ネルが旅で出会う人々の様子や彼女の寝室の環境からも、彼女が田舎でも安定した生活が出来ないことが示される。2人が移動中に会った蠟人形の見せ物をしているジャー

リー夫人と行動を共にする場面でもネルと祖父がお互いに意思疎通の出来ない様子が描かれる。ジャーリー夫人から与えられた馬車で祖父が寝ることになったため、「ネルは手もとにある材料からできる限り良いベッド」を彼のために作り、彼女自身は「ジャーリー夫人の旅行用馬車」(210)で眠る。これらの寝場所の描写は2人が安定した生活にたどり着いていないことを示している。また、ネルが祖父の寝室を整えているのは、彼をいたわるというより外部にさらされないようにするためである。このネルの行動から祖父が十分外的な影響を受け、ネルがそれを嫌っていることが推測できる。この滞在中、彼女が祖父から寝場所を妨害される場面は象徴的である。一度、外部からの影響を受けた祖父が改心し、かつてあったはずの状態への回帰が難しいことは、ネルがかつてあったと思われるイギリスの象徴としてそれにふさわしい場所を見つけ出せないことを示唆している。

またネルを助けたジャーリー夫人が蠟人形の展示をしていることに注目すべきである。蠟人形はかつてあった姿をとどめてはいるが、外見だけを過去から現在にまで引きずっているものの表象として描かれている。「蠟人形の姿は、いまは亡くなり失われている人物を、死を越えて生き長らえさせ、重要な身体上の面影を表したもの」⁽⁶⁾である。それらに囲まれているからネルも「彼女のベッドの周りに蠟人形が並んで立っていたので、それらは生きている人間の姿のようでありながら、その冷酷な静かさと沈黙は人間とは全く異なるもの」(222)と感じる。蠟人形は「保存された体の縮図」⁽⁷⁾で、失われた姿を今にとどめてはいるが、それらは中身のない、容姿のみの不自然な物でもある。ネルもまた守られるべき美化されたかつてのイギリスの象徴として捉えられるが、それも読者が彼女の外見から判断したことである。そのネルは蠟人形を通して自分の祖父の姿を見ている。いつも通りの姿をしている祖父だが、蠟人形同様に、外見だけを残し、彼の内面はなくなっている。彼の姿もまた、過去から現在に至るまでの遺物の縮図として存在している。

祖父の態度は再度外部からの影響を受ける。ロンドンを離れても賭け事の誘惑に抵抗する力は彼にはもう残されていない。2人は出先で雷雨にあい、ジャーリー夫人のところに戻れず近くの宿に寄るが、祖父はそこで賭けをしている男たちの仲間に入る。彼はネルから金をもらうが足らず、彼女が服に縫い付けて隠していた金まで奪う。ネルにとって彼らの行動に影響を与える金は隠さなければならない。彼女は金銭の持つ外的な力を服に縫い付け封印している。彼女は自分が祖父と金との橋渡し役になっていることを知っているがゆえに金を隠す。この状況を考えると、彼女も美化されるほど純粹無垢な存在ではない。ロンドンにいるときも祖父とクウィルプの間をたびたび行き来していたのはネルであり、冒頭の夜の場面でネルが迷子になったときも、クウィルプと祖父との金銭の交渉をした帰りである。ハンフリーは彼女に「何の用事だったのか」と尋ねると、ネルは「それを言っ

てはいけない」と答える。さらにそれは「自分さえ知らない大事な秘密」(10)であると付け加える。祖父とクウィルプのやりとりが、人に言うてはいけないし、自分でも知らない秘密であること、もしくはそれが秘密にされなければならないことであることもネルは知っている。彼女は祖父と金銭に関わる問題を確信し、それに彼女自身が加担していることも承知していたはずである。だから、金は隠さなければならないものだと彼女は認識している。

2人が急遽泊まることになったこの宿でネルが隠した金が祖父によって奪われる出来事から、祖父は蠟人形の姿を反映して描かれていることが分かる。蠟人形同様、彼は外側だけが残されただけの存在であることが彼の行動により暴露さる。ネル自身がそのときの祖父の様子を伝えている。

A figure was there. [...], it crouched and slunk along, groping its way with noiseless hands, and stealing round the bed. She had no voice to cry for help, no power to move, but lay still, watching it.

On it came—on, silently and stealthily, to the bed's head. The breath so near her pillow, that she shrunk back into it, lest those wandering hands should light upon her face. [...].

The dark form was a mere blot upon the lighter darkness of the room, but she saw the turning of the head, and felt and knew how the eyes looked and the ears listened. There it remained, motionless as she. At length [...] she heard the chink of money.

Then, on it came again, silent and stealthy as before, and replacing the garments it had taken from the bedside, dropped upon its hands and knees, and crawled away. How slowly it seemed to move, [...], creeping along the floor! It reached the door at last, and stood upon its feet. The steps creaked beneath its noiseless tread, and it was gone. (232-33)

祖父のこの行動がネルの居場所を脅かしている。外部からの侵略は寝ている間にベッド脇で「静かに」、「こっそり」と、そして「暗闇」のなか「足音も立てずに」実行される。外部から侵入するクウィルプも、彼が登場する場面では音もたてずいつの間にか現れる。ネルと祖父が話している時に、クウィルプは「誰にも見られずに」部屋に入り込み、「ドアから入ったよ。鍵穴を通り抜けられるほど体は小さくないからね」(80)と説明する。田

舎での祖父の行動はロンドンでのクウィルプの行動と変わらない。また、彼がネルの寝ている時間に行動をすることは、ロンドンにいるときの彼の行動と変わっていない。ネルはロンドンでの祖父の行動について「彼は昼に安楽椅子で休む以外は睡眠も休憩もとらない。夜は一晩中毎日のように出かけている」(56)と説明する。田舎でも眠りを拒む祖父はネルにとって「彼の姿をした別の生き物で、彼のイメージを恐ろしく歪めたもの」(235)のようであった。つまり彼自身も蠟人形と同じで、外見だけを現在に引きずりながらロンドンから田舎まで移動しただけである。Clair Woodは「蠟人形の困った特徴は異なるアイデンティティーがその内部に備わりうることである」⁽⁸⁾と書いている。外見では孫のいいなりになっている様子だが、金銭的な欲求に抵抗できるほどにまで、彼の本質は変わらないのである。彼には改善を期待できるような内面がすでに失われ、見た目は祖父であるが、孫が期待するアイデンティティーが彼には備わっていないのである。

祖父が再びベッドで眠ることを放棄したことで、彼の内面や本質がロンドンにいるときと変わっていない、もしくは失われたままであることが露呈する。ネルの祖父はこの時点で祖父の姿をしただけの外部の象徴のようである。ネルは彼に寝場所を与え、眠って欲しいが、金をくすねたあとの祖父の「ベッドには誰もおらず、布団はきれいに敷かれたまま空っぽだった」(234)のである。一方で次の朝、ネルが彼の部屋を覗くと、彼は「静かにベッドの上に横になって」いて、「顔には強い感情や貪欲さ、不安や激しい欲望はなく、静かで平穏なもの」(235)である。祖父の姿は蠟で固められたように、外見だけを残している。このことから彼が祖父の外見をしているだけの存在で、ネルが期待するような彼女の祖父としてのアイデンティティーが失われていることが分かる。彼女にとって眠りにつける場所が安住の場を意味する。また、読者も美化された存在である彼女に落ち着ける場所にたどり着くことを期待する。しかし、ネルの田舎に求める平穏な暮らしは、自分の祖父の行動によって妨害され、最終的にベッドで寝ることを拒む彼女の祖父は「毎晩、また昼間でさえも彼はどこかにいなくなる」(316)ようになる。彼が賭けのためにジャーリー夫人の金を盗むという話を耳にしたことで、ネルは「自分のベッドで寝ようとしたが、誰が眠ることなんてできるだろうか」(322)と嘆く。彼女が恐れているのはもはやクウィルプではなく、彼女の祖父である。彼こそがネルの存在を脅かし続けている。

以上のことから、ベッドで寝るか寝ないかが登場人物の行動に大きく関わっていることが読みとれる。休めるベッドを求めるためネルは田舎へと旅を続けるが、結局彼女の祖父がすべてを台無しにし、ネルは探し求めている場所を見つけれない。ネルが求めている楽園は実はどこにも存在しない。ついには「天使たちが守る」はずのベッドそのものの存在も揺らぎ始める。次のセクションではベッドが守られた安らぎの場所ではなく、死を予

兆させるものへと変貌していく様子を分析する。

2. 死のベッド

ネルと祖父が田舎の学校にたどり着き、その教師と病床に伏せる少年とに出会う場面が第24章と第25章に描かれる。この少年との出会いから、ロンドンから離れ、田舎に向かうネルの旅がよい結末を招くか疑わしくなることが示されている。ここでネルが直面するのは田舎で見つけられるはずの安息の地ではなく、衰弱し死に瀕する少年の姿であった。この少年もベッドで休む様子が描かれている。しかしこれは「天使たちが守る」ベッドとは全く異なる描写である。この少年の描写によって、ネルの置かれた不安定な立場が示唆されていることについて分析してみよう。

病に苦しむ少年の存在と彼が描いた美しい文字を対比させ、教育の持つ力の大きさが描かれている。教師に歓迎され、ネルが目にするものが「美しい文字」で書かれた「壁に掛けられた大きな飾りもの」(188-89)である。それは「君ほどの齢にもなっていないが、とても賢い子供」(189)によるものだと言われ、教師はネルに伝える。彼の作品の美しさと彼自身の病状は正反対の状態である。ここではその美しい文字は教育力を表し、その力によって衰えてしまった少年を対比的に描いている。彼の文字の美しさもここでの教育を忠実に受け入れた結果のようである。また、死に瀕している状態も同時にその結果として描かれている。

この学校での少年の死は、教育の本質的価値がどうあるべきかを問いかけている。学校嫌いの子供たちが放課後元気に遊ぶ姿に対し、美しい文字を書けるようになった少年はベッドから起き上がれない。ある年老いた女は彼の姿を見て「学ぶことでいいことが起こるとは思っていなかった」とつぶやき、教育を受けることに反対の意見を述べている。この少年の祖母も「勉強することでこのような結果になった」と言い、先生に対し「先生に対する恐怖心から読書なんかしなかったら、この子は健康で楽しい生活をしていただろう」と「はだけた格好でベッドで横になって」(196)いる少年の様子を見て嘆く。ここで議論されていることは、教育そのものではなく「先生に対する恐怖心」についてである。この言葉から、この教師も金銭という外的な圧力を体現している可能性があることがわかる。死にかけている子供が先生に対して抱いた感情は、ネルがクウィルプや時には自分の祖父にさえ抱く恐怖心と同じものだろう。少年の祖母たちは学問が金銭と単純に等価交換できるものでないことを知っている。この少年は支払った分以上を取り戻そうとしたことで衰弱していると思われる。John. R. Reedは「ネルと彼女の祖父を助ける貧しい先生は、

彼の学識ではなく、思いやりにおける描写が顕著に示されている。そして彼の場合、貧困と同情心はお互いに補完しあっている」⁽⁹⁾と指摘している。この教師がのちに田舎の教会の「教会書記」(348)となり、その学校をやめてしまうことは、彼自身も外的要因として成り立ってしまう教育や教師の弊害を認識した結果である。

教育を受け、その力に押しつぶされた少年とは対照的な勉強嫌いの子供と彼らの親の言動と行動は、ここで描かれるような金銭的価値としての外的な圧力になりうる教育を皮肉に描いている。この少年以外の勉強嫌いの子供をもつ親たちは、病気の少年の世話をするために午後の授業を「特別な半休」(194)にする教師の行動を責め立てる。彼らは「生徒たちから学ぶ機会を奪うことは完全なる窃盗であり、詐欺である」(195)と教師を責める。教育は、彼らにとって金銭的価値と同じである。彼らにとって教育は金銭的理由から最優先事項であり、支払ったのと同等の教育を受ける権利を主張している。確かに、Woodが指摘するように「『窃盗と詐欺』という強い表現を用いることで、金銭的な事情によって子供の休日が減らされている。(中略)頭の代わりに体を使わせることで、『学ぶ機会を奪う』ことは、学びそのものの価値を下げる」⁽¹⁰⁾という問題もあるだろう。しかし、親たちが主張していることは子供たちが教育を受ける権利やその価値ではなく、親が支払った分の教育を子供が消費する権利とも言い換えられる。授業がなければ教育は消費されず、払い戻しもない。保護者にとって教育とは、金銭と交換されるべき価値なのである。

この考え方は、ジャーリーとの旅の途中で、ネルが寄宿・通学学校の教師ミス・モンフラーズと出会う場面でも紹介される。彼女は「知識を通して、眠っている状態から引き起こされる発展的な力」(239)があるはずだと述べ、「子供の力の程度に応じて、この国の工業を助け、蒸気機関車のことを常に考えることで自らの知性を鍛錬し、週に2シリング9ペンスから3シリング稼ぐことで快適で独立した生活」(239)ができるとネルに説教をする。彼女の言葉は教育の金銭的価値とそれによる新しい国力の両面を示しているだろう。彼女が指し示す価値は知識が国の発展へとつながるというもので、読者がネルに期待する理想の場所ではないことも分かる。ネルは「現実的な子供の姿を映し出した存在ではなく、価値を伝える手段としての存在である」⁽¹¹⁾と Schlicke は指摘する。休暇をロンドンで過ごそうとするこの教師と対比されることで、ネルが持つこのような付加価値は上がる。ネルの存在がロンドンを離れることは、かつてあったイギリスの居場所がロンドンではなく田舎にあることを読者に強く印象づける。あたかもロンドンネルや読者の求めている理想の地となり得ないような描き方である。この教師の述べていることは事実であったとしても、読者は彼女の意見に好感を持つことや共感することが出来ない。

授業を嫌い、休講を喜ぶ子供たちは、教育という目に見えない金銭的価値に無意識に抵

抗している。自分の意志で行動する活発な子供たちを描くことで、ここで描かれる外的圧力としての教育は個人のアイデンティティーを失わせるものとして批判的に扱われている。対照的にこの少年のベッドは、アイデンティティーを失った個人が金銭的価値として描かれる教育という力に抵抗出来ず、動けなくなり、たどり着く場所である。外的な圧力に押しつぶされた少年はベッドで死ぬ。ネルの祖父に見られる、個人の生き方に影響を与える金銭に関わる問題が田舎でも起こっていることが示される。つまり、ネルと祖父が都会から逃げて彼らが抱える問題の解決に至らないことがこの少年の死を通して描かれている。ネルが田舎にあるはずだと信じている「天使たちが守る」ベッドがもはや存在しないことをこの場面から読み取ることができる。

3. 期待と誤解

ネルに純粹無垢で守られるべきかつてのイギリスの姿と、彼女のベッドは天使たちが守らなければならないものであることから、この物語は彼女に過度な役割を押しつけている。ネルの役割について、「完璧であり、神聖であり、そして失われたイギリス国民の知性を提示しながら、その理想的な少女は理想的な妖精と同化する」⁽¹²⁾と Hillard は指摘する。妖精という言葉が読者を誤解に導いた可能性がある。語り手のハンフリーがのちにネルを「奇妙」な存在であると読者に注意を与えながらも、初めて彼女のベッドを見たときには「妖精が眠る」ベッドだと描写している。読者のみならず批評家たちも、妖精という言葉に惑わされているようである。かつてのイギリスの象徴としてのネルは、その存在が安定できる場所を見つけなければならない。その場所は妖精が寝るベッドで、しかも「天使たち」に守られなければならないと読者は思い込む。彼女は読者の意識とともに旅をする。しかし、都市から離れば過去のイギリスを取り戻せるという問題ではない。現在のイギリスと過去のイギリスを都会と田舎という境界線で簡単に切り離すことは出来ない。田舎へ旅に出ることは初めからネルが抱える問題を解決する行動ではなかった。ロンドン出発当初から、田舎に彼らの求める場所があるかどうかは誰にも分からず、解決すべき問題も常に曖昧だった。

この物語の冒頭では、ネルは迷子になっても目的地の家に到着できたことから、この旅の終わりにはきっと彼女の居場所が見つかるはずだと読者に思わせる仕掛けがあった。Patrick J. McCarthy は「ネルは常に骨董品とともに描かれており、骨董品が彼女の物語を支えており、骨董品に囲まれたネルの描写は、生と死、自由と拘束、弱さと強さといった矛盾に富んだもの」⁽¹³⁾であると分析する。しかしこのような矛盾は冒頭で語り手のハン

フリーが、ネルが未来に生きるにしても、過去にさかのぼるにしても「奇妙」であるとして指摘していた通りである。これらの矛盾が彼女の存在を成り立たせ、読者に彼女が救われることを過大に期待させる。J. Hillis Miller は2人の行動について、「ディケンズは田舎の楽園はもはや存在せず、消滅していること、そしていまこの土地で我慢することはあらゆる条件を含め都市での生活を受け入れることだと認識している。都市という監獄から神聖化された自然また神聖化された過去へ逃げることは死と同じである」⁽¹⁴⁾と言及している。この分析から、ネルは実は祖父の存在を受け入れられていないということがうかがえる。彼女にとってロンドンで暮らしてきた祖父の存在を認めることが、彼女が抱える問題を解決する方法である。彼の存在や行動を認められないから、彼女は、田舎に楽園があることすら定かでないにもかかわらず、彼を田舎へと連れ出す。しかし、祖父の非行により、問題はより複雑となる。「ネルの田舎への旅は切り離すことの出来ない融合物を表現している」⁽¹⁵⁾という Schlicke の分析は、ネルと彼女の祖父の2人の存在が最初から分解できない融合物であることを示すだろう。彼女が解決すべき問題は、彼女の祖父の金銭に関わる問題である。ネルにとってもっとも深刻な矛盾は、都市で起こる問題を抱えた祖父を田舎に連れて行き、彼と常に行動をともにしていることである。このような矛盾を抱えた彼女は、この作品当時のイギリスそのものの象徴として捉えられる。

学校をやめて教会書記になった教師から与えられた教会脇の古い家を見たネルの様子から、彼女が美化されたかつてのイギリスの象徴的存在でないことが判明する。そこは「ずっと昔に一その古い場所では変化さえ古いものだった一寝るための小部屋を作るために木の仕切りが部屋の一部に作られていた」(388)。この描写からネルが迷宮から出口にたどり着いたと読者は思う。しかし、読者が期待していた彼女に与えられたその場所は、ネルに喜びをもたらさない。このことは、ネルが過去にさかのぼる必要がある存在でないことを明らかにする。そしてその建物は彼女に死を想起させる。ネルは、そこは「死を学ぶのいい場所」だと言い、教師はすぐに「生きる場所で、生きることを学び、心と体の健康をたかめる場所」(389)だと訂正する。この場所を見たとき彼女は「とても美しい場所だ」と言うが、「低い声」(388)で言い、ネルが喜んでいる様子はない。彼女が求めていたのはこのような古い場所ではない。

ネルは美化された過去のイギリスを象徴してはいない。彼女をそのような象徴に仕立て上げたのは当時の読者の願望である。確かに Hillard の、「多くのヴィクトリア朝の人々は、民間伝承は純粋な（つまり架空でもある）過去を示すものとしてその価値を認めている。ヴィクトリア朝文学に見られる失われた幼年時代という永遠に続くモチーフの中に、幼年時代と民間伝承が重なり合うことは驚くことではない」⁽¹⁶⁾という指摘どおり、ネルの存

在は純粹であり、美化されたかつてのイギリスの象徴であると読むこともできる。そのため、ハンフリーの冒頭のネルについての暗示も簡単に無視し、ネルが失ったと思っている居場所を見つけ出す存在であり、そこには妖精にふさわしい天使たちが守るベッドがある、と読者は考える。しかし、彼女が死ぬことでこの物語はこのような当時の人々の願望を裏切ることになる。そのベッドにたどり着いたネルが死ぬという結末によって、読者は自分の読み方が間違っていたことに気づく。Reedは、子供がベッドで死ぬことでその場は「聖域となり、子供たちの資質は時間の影響や苦しみから逃れられる」と述べる。このような子供の死と対比させることで、「大人の墮落した世界から子供を排除することは、その社会の怠慢の核心部分への高まる意識を示し、またその社会が衰退していることまでを明らかにする」⁽¹⁷⁾と続けている。ネルを現実世界から切り離すことで、一方、現実世界がうまく機能していないように思わせる。このような機能不全を起こしているのは当時の読者の物語に対する向き合い方においてであることをネルの死は知らせる。この物語はネルを死によって現実世界から切り離すことで、機能しなくなったステレオタイプの当時の読み方から読者を救おうとしているようでもある。この物語によって、読者は自分たちが生きる時代の物語の読み方が蠟人形のように形骸化していたことを知る。ネルの死はヴィクトリア朝の読者に新しい読みの可能性の1つを提案している。

結論

読者はネルに、かつてあったかもしれないイギリスを取り戻す任務を彼女に与える。それは田舎に行けば存在し、発見されるだろうという誤解も含んでいる。読者はネルの姿から理想的なイギリスを想像し、田舎に行けばそれが見つかることを根拠なく期待する。すべての出来事は彼女が安全にこの迷宮から出口にたどり着くまでの少しの間のことだと信じ、旅の途中で彼女が遭遇する試練に、読者も一緒に耐えることができる。読者が追い求めた場所は現実ではなく理想のなかにあった。彼女が死ぬことで読者はそれが幻想であることに気づく。彼女は「天使たちが守る」ベッドも、出口も見つけることなく死ぬことで、読者を夢から醒まさせる。ベッドの中で夢を見ていたのはネルではなく読者である。現実逃避をし、たどり着くことのない理想を追い求める読者を目覚めさせるには、まだ14歳の少女の死が必要であった。ネルは、理想とかけ離れた日常を送る読者に理想的な場所が存在することを期待させ、読者は物語の中でその理想に追いつこうとネルの旅に同行し、彼らの夢は彼女の旅の終わりによって裏切られてしまう。

ネルと田舎に逃げることで、安心した生活が出来ると思いながらも賭け事から抜け出せ

ない祖父の姿こそが当時の読者の姿を反映している。彼は物語の古い読み方から抜け出せない読者の姿の象徴である。読者は孫を苦しめるこの祖父を疎ましく感じるが、彼の姿が今この物語をステレオタイプ的に読み、ネルは必ず救われる存在だと信じる読者自身の姿である。14歳の少女であるネルに大きな負荷をかけているのは、彼女の祖父同様、読者である。彼女は当時の読者が生み出した幻影なのかもしれない。ネルは読者になにも約束などしていない。読者は、彼女をイギリスの象徴的存在だと思わせる仕掛けに惑わされる。ネルが休める天使たちが守るベッドは、読者が生み出した架空のベッドである。ネルが明らかにするものは、彼女が象徴的存在であるかのように思われてしまう時代とその時代に生きる読者の問題である。ネルは自分の死によって、その問題のありかを知らせるべく新しい読みの可能性を示してみせた。

注

- (1) Charles Dickens, *The Old Curiosity Shop* ed. by Elizabeth M. Brennan (Oxford: Oxford University Press, 1998), p. 17. 以降原文の引用はこのテキストを使用する。括弧内はページ数を示す。
- (2) Paul Schlicke, 'The True Pathos of *The Old Curiosity Shop*', *Dickens Quarterly*, 7 (1990), 189-99 (p. 193).
- (3) Paul Schlicke, 'Embracing the New Spirit of the Age: Dickens and the Evolution of *The Old Curiosity Shop*', *Dickens Studies Annual*, 32 (2002), 1-35 (p. 21).
- (4) Molly Clark Hillard, 'Dangerous Exchange: Fairy Footsteps, Goblin Economies, and *The Old Curiosity Shop*', *Dickens Studies Annual*, 35 (2005), 63-86 (p. 75).
- (5) Gareth Cordery, 'Quilp, Commerce and Domesticity: Crossing Boundaries in *The Old Curiosity Shop*, *Dickens Quarterly*, 26 (2009), 209-233 (p. 211).
- (6) John B. Lamb, 'The Wax Girl: Molding Little Nell in *The Old Curiosity Shop*', *Dickens Studies Annual*, 44 (2013), 127-42 (p. 132).
- (7) Ibid., p. 140.
- (8) Clair Wood, *Dickens and the Business of Death* (Cambridge: Cambridge University Press, 2015), p. 75.
- (9) John R. Reed, *Victorian Conventions* ([Athens]: Ohio University Press, 1975), p. 95.
- (10) Wood, p. 72.
- (11) Paul Schlicke, 'The True Pathos of *The Old Curiosity Shop*', *Dickens Quarterly*, 7 (1990), 189-99 (p. 197).
- (12) Hillard, p. 69.

- (13) Patrick J. McCarthy, 'The Curious Road to Death's Nell', *Dickens Studies Annual*, 20 (1991), 17-43 (p. 25).
- (14) J. Hillis Miller, *Charles Dickens: The World of His Novel* (Cambridge: Harvard University Press, 1958), p. 95.
- (15) Paul Schlicke, 'Embracing the New Spirit of the Age: Dickens and the Evolution of *The Old Curiosity Shop*', *Dickens Studies Annual*, 32 (2002), 1-35 (p. 22).
- (16) Hillard, p. 68.
- (17) Reed, p. 168.